

口絵



写真1 桜塚古墳出土ガラス小玉

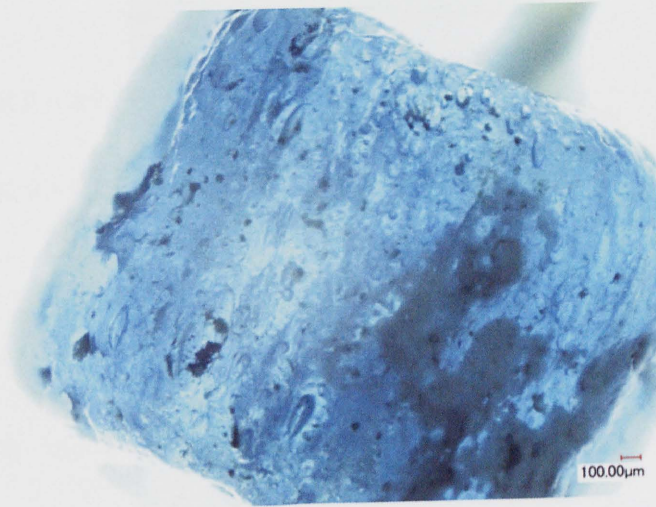


写真2 桜塚古墳出土ガラス小玉マイクログラフ写真

つくば市水守桜塚古墳出土のガラス小玉

つくば市水守桜塚古墳（4世紀）は、筑波山の西側を南流する桜川の右岸に位置する、全長59mの前方後円墳である。埋葬施設は割竹形木棺を内蔵する粘土槨で、変形四獣鏡、石釧、短剣、刀子状鉄器とともに、瑪瑙製勾玉、滑石製管玉、琥珀玉、ガラス小玉など多数の玉類がほぼ原位置を保って出土している（写真3）。それらのうち、被葬者の右手側（b群）から出土した管玉6点とガラス小玉27点は、一連の手玉を構成していたものと考えられる。

写真1は桜塚古墳から出土したガラス小玉である。径、高さともに3～5mmの均一な一群で、孔と平行に伸びる内部気泡が確認されることから（写真2）、管切り技法の小玉である可能性が高い。これらのガラス小玉の化学組成を分析した結果、形態上の差異がほとんどみられないにもかかわらず、高アルミナカリガラス、高アルミナソーダ石灰ガラス、植物灰ソーダ石灰ガラスという3種類の組成タイプのガラスが混在していることが確認された。近年の化学的な研究の進展により、それぞれの組成タイプの原料ガラスは生産地が異なると考えられている¹⁾ことを考慮すると、見た目の類似した異なる産地のガラス小玉が一連の装身具を構成していることになり、ガラス製品の流通や装身具の製作について考える上では興味深い資料である。

なお、桜塚古墳の近くにある水守2号墳（4世紀、円墳）では、300点近い淡青色ガラス小玉とガラス製勾玉の出土が確認されており、注目される²⁾。

加藤千里



写真3 桜塚古墳棺内遺物出土状況

1) 本誌51頁表1を参照。

2) 筑波町史編纂専門委員会 1989 『筑波町史』。